

「フレーブニコフについて」(1928)をめぐる シクロフスキーとトィニャーノフ

八木 君 人

0. はじめに

一般には「ロシア・フォルマリズム」といわれる1910年代に勃興し、1920年代末にはその理論的な活動を終える文芸運動は、のちの概説書等が与える印象ほどには、決して一枚岩な「流派」ではなかった。そもそも、何らかのグループとして存在したのは、ペテルブルクのオポヤズ（詩的言語論研究会）とモスクワのモスクワ言語学サークルであり、両者の活動を総称して、とりわけ後の世代の人々が「ロシア・フォルマリズム」と呼び習わしているにすぎない。このように、一般的にはひとまとまりに語られがちなロシア・フォルマリズムではあるが、本論では、オポヤズの中心メンバーであったヴィクトル・シクロフスキー（1893-1984）とユーリー・トィニャーノフ（1894-1943）によって主に書簡で交わされた、トィニャーノフ「フレーブニコフについて」(1928)をめぐる「論争」に焦点をあて、錯綜するこの議論に一定の解釈を与えることが目的のひとつとなる。

ところで、そのシクロフスキーとトィニャーノフにボリス・エイヘンバウム（1886-1959）を加えた「オポヤズの三巨頭」の間で交わされた書簡は、彼らの文学観や理論的展開に関して、彼らの間でどういったやりとりがあったかを窺い知ることのできる貴重な資料であるが、一方、彼らにとって「書簡」は、文学（史）研究における対象でもあった。たとえば、プーシキン時代の「親愛なる書簡」といわれるジャンルの研究に着手したのは彼らであったとされているし、具体的に例を挙げると、トィニャーノフは「文学的事実^{ファクト}」(1924)の中で文学体系に変化をもたらす構成原理としての「書簡」の重要性を指摘していたり⁽¹⁾、彼やエイヘンバウムの教え子にあたるニコライ・ステパノフ（1902-1972）は、「師」を編者として1926年に刊行された記念論集『ロシアの散文』に論考「19世紀初めの親愛なる書簡」を寄せたりしてもいる⁽²⁾。無論、彼らの書簡が当時、公刊されていたわけではないが、「書簡」というジャンルは、研究者のヤン・レフチェンコが「フォルマリストたちにとって、研究対象であったのみならず、実践する対象でもあった」⁽³⁾と述べるほど、彼らの「実践」において重要な意義をもつものであった。また、理論的著作の枠組みを離れて述べれば、シクロフスキーは、書簡体小説『Zoo、あるいは愛についてではない手紙、あるいは第三のエロイーズ』(1923)を著し、その自伝的散文『第三工房』(1926)に

はヤコブソンやエイヘンバウム、トィニャーノフ宛の「手紙」を含めている。

さらに、一般的には、書簡が差出人と名宛人をはっきりと持つように、論考におかれた献辞の意義についてもレフチェンコは注意を促している⁽⁴⁾。たとえば、上述の「文学的事実」^{ファクト}はシクロフスキーに、同じくトィニャーノフによる「文学の進化」^{エヴォリューション}について(1927)はエイヘンバウムに献げられているが、これら献辞は、前者がシクロフスキーの提起する文学史の交替図式に対する、後者が、「文学的事実」^{ファクト}を参照しながら書かれたエイヘンバウムの「文学的慣習」^{アイト}(1927)に対するトィニャーノフによる応答＝論争の意味をもつと考えられる。

ややもすれば「内輪」にすぎような印象を与えるだろうこうした「知」の作られ方は、しかし、知のあり方のひとつを示すものとして特徴的ではある。当然のことではあるが、「理論」は真空状態の中に生まれるわけではない。そこにはある種の歴史性が刻まれるわけだが、書簡等のやりとりは、そうした痕跡を如実に示す資料といえる。本論では具体的にそれらを検討することで、彼らに特有の「文学(史)研究」のスタイルのひとつ——現在におけるアクチュアリティを文学研究に対して求める姿勢——を提示することにもなるだろう。

さらに視座を広くとれば、こうした知的環境の様態を、「ロシアあるいはソ連文化論」として展開することも可能かもしれない⁽⁵⁾。ここではそうした視点から論を展開することはできないものの、そうした可能性を備えた素材として、トィニャーノフとシクロフスキーの「論争」を提示することもまた、本論の目的のひとつである。

1. 「フレーブニコフについて」を巡る論争の背景

以下では、シクロフスキーとトィニャーノフの間で、1929年頃交わされていた書簡を中心に検討する。これは、トィニャーノフの論文「フレーブニコフについて」をめぐる意見交換であり、恐らく感情的なものも加わった「論争」⁽⁶⁾であった。トィニャーノフとシクロフスキーを中心に、まずはその背景を説明しておこう。

トィニャーノフとステパノフの編集で、ヴェリミール・フレーブニコフ(1885-1922)の五巻本作品集の刊行が企画され、1928年(初め?)にその第一巻が出版される。その巻頭論文として、トィニャーノフの「フレーブニコフについて」が置かれた。それに対してシクロフスキーは、『新レフ』1928年11月号で「分離のもとで」というエッセイを発表し、トィニャーノフのそのフレーブニコフ論を批判する。

一方トィニャーノフは、1928年12月、遅くとも14日にはプラハへ行き、翌年1月初めまで滞在中だったが、滞在中、12月16日には「文学の進化」^{エヴォリューション}についての報告を行い、ロマン・ヤコブソン(1896-1982)と共に「文学研究および言語研究の諸問題」を著し、これらの出来事をシクロフスキーに宛てた手紙の中で綴っている。この「文学研究および言語研究の諸問題」は、年明け(1929年)に出版された1928年12月号『新レフ』に掲載された。本論でとりあげる書簡のやり

とりが行われるのは1929年3月からであるが、その間、遅くとも1929年2月初めにはティニャーノフの論文集である『擬古主義者と革新者』がプリボイ社から出版され、その中には「フレーブニコフについて」も含まれている。ちなみに、この論文集の計画は、1928年1月終わりから2月初めにシクロフスキーに宛てられたティニャーノフの手紙にもあらわれており、タイトルの相談もしている⁽⁷⁾。

さて、本論で検討する「論争」が起こったこの時期が興味深いのは、1. それまでの「フォルマリズム」の乗り越えをはかった重要な論考「文学研究および言語研究の諸問題」がティニャーノフとヤコブソンの共著で出されたこと、2. 1928年の夏頃に『新レフ』からマヤコフスキーが脱退したことにより（あるいはシクロフスキーとリーリャ・ブリークの関係が悪化したことにより）、シクロフスキーが『新レフ』に見切りをつけ、秋以降、オポヤズを復興させようと奔走していたこと⁽⁸⁾、3. しかし、結果的に、シクロフスキーはその後、1930年に「学問的誤謬の記念碑」を発表し、(マルクス主義陣営からはその不徹底ぶりを痛烈に批判されるも)かたちの上では形式的方法を過去のものとし、一方ティニャーノフは、1月に論集『うつろな詩』への序文として「パロディについて」を寄せて以降、理論的な著作を書くことはなく、もっぱら小説へと向かうことになり、いわゆる「フォルマリズム」としての理論的模索の季節が終わること、これらの理由による。なお、補足しておけば、ティニャーノフやエイヘンバウムらが活動拠点としていたペテルブルクの国立芸術史研究所の「肅清」に関する記事が、1930年1月8日付け「プラヴダ」紙上にあらわれ、それが公式的には国立芸術学アカデミーにとってかわる春頃には、運動としてのロシア・フォルマリズムは実質的な終焉を迎えることになる。ティニャーノフとシクロフスキーの書簡のやりとりは、こうした時期にあたる。

「分離のもとで」を契機として交わされた書簡の中では、「フレーブニコフについて」だけでなく、『擬古主義者と革新者』の中にある中心的な論考である「擬古主義者とプーシキン」にも触れられている。後に見るように、シクロフスキーは「分離のもとで」の中で、「擬古主義者とプーシキン」の問題点を指摘しながらも賛辞をおくり、「擬古主義者とプーシキン」において論じられたようにフレーブニコフも論じるべきなのだと主張している。

ところで、この「フレーブニコフについて」について、エイヘンバウムは次のような指摘をしている。

これ[フレーブニコフの「偶然」に対する新しい眼差し]は、ただフレーブニコフについて述べられているのではなく、ティニャーノフ自身の、その仕事について述べられているのだ。[……] フレーブニコフについての論文は、ティニャーノフの自分自身の仕事についての註釈となりうる。つまり、それはプログラムの意味を持っているのだ。⁽⁹⁾

個別の論点は措くとして、このようなエイヘンバウムの指摘が大枠において適切であるならば、「フレーブニコフについて」はトィニャーノフの仕事の枠組みを浮き彫りにするようなものである。それに対して、盟友シクロフスキーはいかなる批判を加えていったのか。

2. シクロフスキー「分離のもとで」におけるトィニャーノフへの批判

上に挙げたいいくつかの資料の中で「フレーブニコフについて」に次いで時期的に早い、「分離のもとで」をまず見てみよう。これは論文というよりも短いエッセイであるが、「規範化する者たち」と「恵まれた農場主たち」という二つのパートに分けられている。後者において、自らの「天才的頭脳」を宣言するエイゼンシテインを皮肉ったオシーブ・ブリークについて述べられ、そのブリーク自身が今度はマヤコフスキーを特別扱ったことについて、シクロフスキーは批判している。エッセイの最後の一文、「もし古いグルーピングが時代遅れになったら、それは新しいグルーピングの誕生を意味している。なぜなら人々が働き考えるのは、一緒にでなければならぬのだから」⁽¹⁰⁾が示しているように、シクロフスキーの批判の基本線は、『新レフ』の生産・集団主義的イデーを掲げることによって、グループから個人を抜き出す(=「分離」)ことに対してである。

そこに記されるトィニャーノフ「フレーブニコフについて」についての批判も同様で、彼がフレーブニコフを未来派というグループから取り出し、「新しい古典」を創造してしまったことに向けられている。シクロフスキーの言葉で述べるなら、「フレーブニコフについての論文においてトィニャーノフは、森を取り除きだし、逆方向の仕事、古典の創造の仕事、グループ、そしてジャンルから作家を分離することにかかずらいだした」⁽¹¹⁾。ここで語られる「逆方向」とは、シクロフスキーが評価する「擬古主義者とプーシキン」に代表されるトィニャーノフの文学史的工作(と文学史的小説)に対して、「フレーブニコフについて」がもつ方向性のことである。

シクロフスキーはまず、「トィニャーノフはその古い文学に関する理論的な論考において、また自身の小説においてでさえ、[単数形の]作家を分散させ、作家から光沢を取り除くことができた。トィニャーノフは、チュツチェフと擬古主義者たち、プーシキンとキュヘリベークル、グリボエドフとカテーニン、それらの結びつきを示し、ジャンルのなものとグループ的なものを独自に理解することに成功した」⁽¹²⁾というように、トィニャーノフが「擬古主義者とプーシキン」で明らかにした仕事を理解し、一応は高く評価している。

それに対し、「どんな学派にもどんな流派にも、この人[フレーブニコフ]を加える必要はない。どんな詩人の詩と同様に、彼の詩も繰り返され得ないものなのだ」と「フレーブニコフについて」で述べるトィニャーノフを引用し、シクロフスキーは、「フレーブニコフを未来派から分離すること、それは理論的に反動的な作業だ。それはフレーブニコフにとってマイナスであり、というのはそれが、古典を作り出す、また文学的グルーピングを終わらせようとする、まさにいつもそ

のような時に典型的な作業であるからだ⁽¹³⁾と批判する。

つまり、たとえば、「擬古主義者とプーシキン」でプーシキンが論じられる際、その作家個人の資質についてではなく、文学的環境、周囲の作家たちとの相互作用についてこそを軸にティニャーノフは論じているのであるが、そのティニャーノフが、フレーブニコフに関しては彼をグループや運動から分離し、その個人的資質を賛美しているとして、そのことをシクロフスキーは批判しているのだ。

また、深読みに過ぎる誹りを受けるかもしれないが、先に挙げたティニャーノフの文章——とりわけ、「どんな詩人の詩と同様に」——をシクロフスキーがわざわざ引用していることから、実は、ティニャーノフの文学（研究）観と自らのそれとの温度差を表明しているとも捉えられる。シクロフスキーの引用する先のティニャーノフの見解はきわめて平凡なものだといえるが、翻って考えれば、あらゆる偉大な詩人がフレーブニコフと同様に、「逆方向」で論じられる可能性を有している、そうした態度をティニャーノフがとっているともいえよう。「プーシキンがいなかったとしても、いずれにしる『エヴゲーニイ・オネーギン』は書かれていただろう⁽¹⁴⁾」というブリークによるフォルマリズムの極端な誇張に、いわゆるフォルマリストたち全てが共鳴したわけではないが、シクロフスキーにとっては「フレーブニコフについて」のティニャーノフの態度よりは、少なくともこの時点においては近く感じていたかもしれない。なぜなら、シクロフスキーにとっては、「個人」を「分離」するのではなく、「人々が働き考えるのは、一緒にでなければならない」からだ。

それでは、「フレーブニコフについて」と「分離のもとで」に纏わる、書簡における二人の「論争」を検討していこう。

3. 「フレーブニコフについて」、「分離のもとで」を巡る書簡で論争

書簡での論争は、「分離のもとで」へのティニャーノフによる反論というかたちで、1929年3月23日付のシクロフスキー宛ティニャーノフの手紙の中で、「レフからのプレゼントを受け取ったよ、その中で私が罵倒されている号さ。ありがとう。／言っておくけど、全く同意しない」というかたちで幕を切る。そこでティニャーノフは自らのフレーブニコフ論について、自分の立場を次のように主張する。

流派が死んで崩壊した後、この死んだ流派のリーダーとして、あるいは何か他のものに変った流派のリーダーとして、フレーブニコフを復活させようとする事、それは反動的な課題であり、文学の発展にとって今は不要な復古である。フレーブニコフにおいてこの流派が気付かなかった側面、現在においてパンのごとく必要な側面、それらを明らかにすることこそ、正しい課題なんだ。⁽¹⁵⁾

ここでトィニャーノフがいつているのは、ある流派（この場合は未来派が念頭にある）の持つていたアクチュアリティがすでに失われたにもかかわらず、その中の一人物（フレーブニコフ）を旗頭にし、その流派を復活させることは「反動的」であり、「今は不要な復古」であるのだが、そうではなくて、その流派が時代的なアクチュアリティをもっていた当時には捉えきれてはいなかったものの、フレーブニコフの中にある、「現在においてパンのごとく必要な側面」を解明することが課題であるということだ。

その後、トィニャーノフは、シクロフスキーが「分離のもとで」で示した態度を、理論的な問題としてではなく、次のようなかたちで語る。

レフは捨てられた女の印象を生み出してよ。愛人が去ってしまい、正夫のトレチャコフは彼女を満足させられないでいるんだ。／また、人々が分散していくのは、1. 同時に別々の方へ、2. 別々の時に別々の方へであって、女性から離れるのと一緒さ。例えば、私ははっきり理解しているよ、君がしばらくの間、レフに関しては1. で、オポヤズに関しては2. でわかれていったということだね。⁽¹⁶⁾

ペテルブルクで活動するトィニャーノフやエイヘンバウムとは異なり、1923年に11月に亡命先のベルリンから帰国し、モスクワに住んでいたシクロフスキーは、『新レフ』を刊行していた「レフ」に属していたが、1928年の夏頃にマヤコフスキー（「愛人」）が去り、『新レフ』1928年8月号からはトレチャコフ（「正夫」）が編集を務めていた。前節で述べた通り、そうした状況に見切りをつけ、シクロフスキーはオポヤズ再興を目指すのであるが、トィニャーノフはここで、そうした彼の態度や陥っている状況を揶揄しているといえる。だが、いうまでもなく、オポヤズ再興はトィニャーノフ自身の問題でもあった。手紙の末尾で再び、シクロフスキーの批判を受け入れないことを宣言し、「フレーブニコフについての論文には同意しない。けれど、一つのことには賛成するよ。それは、われわれはお互いなしでは生きていけないということさ。ここにヤコブソンがいないせいで、われわれはちょっと惨めだな」⁽¹⁷⁾と結んでいる。

さらに注目しておきたいのは、上に引用したシクロフスキーの態度に関する評言と結びの間に置かれたトィニャーノフの「そのことが君を好きであることを妨げることもないし、妨げたこともなかった。君の論文に対してまったく腹を立ててもいない。気持ちよくさえある。それは抒情詩であり、オポヤズに対する憂愁だ、今の君のね」⁽¹⁸⁾という言葉である。ここで指摘したいのは、無論、彼らの厚い友情といった類のものではなく、トィニャーノフが「分離のもとで」に見て取れるシクロフスキーの心理的動機づけを別出しつつ、そのことを、現在、自分たちにとってアクチュアルな問題であるオポヤズの再興に結びつけて指摘していることである。つまり、何かを論

じるにあたって、たんにニュートラルな（あるいは科学的な）立場から対象を論じるのではなく、自分たちの焦眉の課題に引き寄せて考えるという彼らに特有の研究・批評のスタイルが、ここに端的にあらわれているといえる。

さて、そのすぐ後、3月31日付のシクロフスキーに宛てた別の手紙で、ティニャーノフは自分のフレーブニコフの見解について自己批判することになる。

フレーブニコフに関する論争において、もしかしたら私は正しくないのかもしれない。残念なのは、初期未来派において何か辺境的な流れがあったということで、それは、私を興奮させた東洋との結びつきの中にある。これはただフレーブニコフのみだと思って、私は彼を全ての流派に対置させた。というのは、マヤコフスキーにはこれが見られないから。恐らく私は正しくない。そこにはまだグローその他がいる。フレーブニコフを流派から引き出す必要はなく、彼をマヤコフスキーで通分することなく行うべきだったのだ。⁽¹⁹⁾

ここでのティニャーノフの自己批判は、自らが未来派の中でフレーブニコフにのみに特徴的だと考えた「東洋との結びつき」が、実はそうではなく、「グローその他」の中にも認められるのであり、シクロフスキーが指摘するように、フレーブニコフをわざわざグループから「引き出す＝分離」する必要はなかったということである。

この議論は一旦、ここで終息するが、しかし、その後、いくらか時が流れ、1933年にそのフレーブニコフの作品集の第五巻が刊行され、恐らくはそれを受けた1934年2月、ティニャーノフへの手紙の中でシクロフスキーは、この問題を蒸し返すかのように次のように述べている。

私は君を文学的に認めない。／われわれが出会った時から、私は認めていない。／おそらく、二つの糸が芸術へと歩んでいる。君は継続的な文学を思考し、君は擬古主義者で、擬古主義者としてマヤコフスキーやフレーブニコフを感じているんだ。文学史家の仕事は、この点でなにかゲームに似ている、そう、例えば、黄金の門だ。人々を試し、彼らを自分の陣営に引っぱっていく時、人々は鎖状に集まって、誰が誰を引き込むのかを眺めているんだ。／[……]／フレーブニコフの歩みや彼の独立性を取り除き、彼の運命をただ間違っただけのものにし、統一的な歩みを生み出しながら、統一的な方法をまとっている君は間違っている。⁽²⁰⁾[下線は引用者による。]

このシクロフスキーの批判の中で、とりわけ、「フレーブニコフの歩みや彼の独立性を取り除き」、「統一的な歩みを生み出」す点でティニャーノフを彼が批判するのは、「分離のもとで」で批判したのは正反対の印象を与えるかもしれない。もしかしたら、ここにもシクロフスキーの

感情的な動機づけがある可能性は否定できないものの、ここでは理論的水準で考えていきたい。これらのやりとり全体の錯綜をどう解釈すべきなのか。

まず、シクロフスキーが「分離のもとで」でトィニャーノフに向けた批判が、フレーブニコフを未来派から分離して論じている点にあることを、トィニャーノフは正しく理解している。しかし、トィニャーノフは、その批判の契機がシクロフスキーの「オボヤズへの憂愁」にあると読むことによって、トィニャーノフがフレーブニコフを未来派から分離して「流派」を無効化したことをシクロフスキーが批判するのは、オボヤズ再興という当時のシクロフスキーの試みに水を差すような挙措と映った故だと考えたといえる。つまり、トィニャーノフは、「未来派＝オボヤズ」というパラレリズムをシクロフスキーの中に穿った形で見ているということだ。それ故、「分離のもとで」において「もし古いグルーピングが時代遅れになったら、それは新しいグルーピングの誕生を意味している」とシクロフスキーが述べるにしても、トィニャーノフにとってはむしろそのことが、レフからオボヤズ（の再興）へと鞍替えしたシクロフスキーによる「反動的な課題」、つまり「今は不要な復古」と映ったと解釈できる。

一方、シクロフスキーにしてみれば、トィニャーノフが初期未来派における「辺境的な流れ」を考慮することなく、フレーブニコフについての誤った特殊性を取り出してしまったことを自己批判したとしても、それは、自分の批判に込めていることにはならないだろう。というのは、シクロフスキーにしてみれば、フレーブニコフを独立して取り上げるというそのトィニャーノフの方法論自体を批判したのであり、決して、その独立性を示す弁別の特徴の是非を問うているわけではないからだ。

「フレーブニコフについて」でのトィニャーノフの基本的なテーゼは、「彼〔フレーブニコフ〕の理論の本質の全ては、詩における重心を音の問題から意味の問題へと移し替えたこと」⁽²¹⁾であり、それ故、フレーブニコフの言葉を「無意味」と捉える人は、「革命がいかに同時に新しい体制であるかを見ない人」⁽²²⁾であり、フレーブニコフが意味論的に新しいシステムを構築し、「文学において革命を起こすことができた」⁽²³⁾ということであった。そうしたかたちで、フレーブニコフは流派から「分離」した存在として提示されることになる。シクロフスキーは触れていないが、彼がフレーブニコフを未来派から分離して論じることを批判するとき、念頭にあるのはこの「フレーブニコフについて」の基本的なテーゼであると考えべきである（「分離のもとで」においてエイゼンシテインの「天才的頭脳」（を皮肉ったブリーク）について触れられていたことを思いだそう）。

「分離のもとで」に関して、トィニャーノフにとって盲点となっていたのは、恐らく、プーシキンについて論じる時とフレーブニコフについて論じる時の自らの態度の相違である。トィニャーノフが「擬古主義者とプーシキン」で描き出すプーシキンは、当時の文学的環境・相関関係の中で自らの歩みを進めるという、いわば受け身的な「進化」を生きている。そうしたアプロー

チを、シクロフスキーは評価した。「プーシキン」という個人を取り上げて中心的に論じている点を考えれば、「フレーブニコフについて」で「フレーブニコフ」を「分離」して論じることとの相違は曖昧であるが、ティニャーノフの描き出すプーシキン像とフレーブニコフ像との差異は明瞭で、ティニャーノフの表現を借りて端的に言えば、フレーブニコフは「革命」だったということにある。図式的に述べるならば、「擬古主義者とプーシキン」を評価し、「フレーブニコフについて」を批判するシクロフスキーにとっては、「擬古主義者とプーシキン」の「と」が重要であったのであり、そのシクロフスキーにとっての「と」とは、ティニャーノフには、自らが「フレーブニコフについて」の冒頭で批判した「と」であった⁽²⁴⁾。

4. おわりに：「文学史」に仮託するもの

ティニャーノフは、その「と」に関して次のように述べている。

フレーブニコフについて語るには、シンボリズムや未来派について語る必要もないし、ザウミについて語る必要も、必ずしもあるわけではない。なぜなら今日までそうやられてきており、フレーブニコフについては語られず、「とフレーブニコフ」についてが語られてきたからだ。例えば、「未来派とフレーブニコフ」、「フレーブニコフとザウミ」といった具合に。[……] /これは偽りのように思われる。⁽²⁵⁾

彼がここで述べているのは、「フレーブニコフ」はつねに「と」で語られてきたということである。ティニャーノフは、そうした語られ方からフレーブニコフを解放するために、フレーブニコフをそこから「分離」する。そしてそのことを、シクロフスキーは批判した。このときすぐさま気づくのは、プーシキンのような文学史的に評価の定まった大作家を論じる対象にする場合と、同時代の作家を対象にする場合との間に生じざるを得ない、アプローチの相違である。つまり、シクロフスキーが評価する「擬古主義者とプーシキン」でのティニャーノフの姿勢は、そもそも偉大な作家としてあらかじめ「分離」されているプーシキンを同時代の文学環境の相関に組み込むことで、その中でのプーシキンの「進化」を明らかにし、当時に関する文学史を組み替えるものであった。しかし、彼らと同時代のフレーブニコフは、「と」で語られるように、いまだそうした「分離」された地位を得ていない。

もう一度、シクロフスキーが「分離のもとで」で行ったティニャーノフへの批判を確認しておくと、ティニャーノフは、「古典の創造の仕事、グループ、そしてジャンルから作家を分離することにかかわらずいだした」が、「フレーブニコフを未来派から分離すること、それは理論的に反動的な作業」であり、それがフレーブニコフにとってマイナスなのは、「古典を作り出す、また文学的グルーピングを終わらせようとする、まさにいつもそのような時に典型的な作業であるか

らだ」。つまり、「分離」し、「古典を作り出」し、「文学的グルーピングを終わらせようとする」姿勢、それが、「理論的に反動的」なのである。

実際、前節で引用した1934年2月のシクロフスキーのトィニャーノフへの手紙の中でシクロフスキーは、「文学史家の仕事」として「継続的な文学を思考し」ているトィニャーノフを批判しているが、シクロフスキーがトィニャーノフのフレーブニコフの扱い方に対して非難するのは、この「継続的な文学」を可能にする「文学史」のレベルにおいてだと考えるべきである。シクロフスキーにとっては、そもそも、そうしたかたちで文学史を作ること（＝「古典の創造」）が、従来の、「理論的に反動的」だということだ。

では一体、シクロフスキーはどのようなかたちで「文学史」を構想するのか⁽²⁶⁾。「フレーブニコフについて」への言及はないものの、同じ時期のシクロフスキーのトィニャーノフ宛の手紙の中で、シクロフスキーは、「擬古主義者とプーシキン」の問題点を指摘しながら、以下のように語っている。

文学は非時間的であって、つまり、文学はピアノのようなものではなく、オルガンのようなもの——音が長く続いているもの——なんだ。従って、原因と結果の同時性があり、つまり、モードは交替するけれど、たゆたい続けている。／ [……]「擬古主義者とプーシキン」の欠点、それは、二つのラインの（方法論的には正しい）孤立性であり、立体的に計測されるべき課題が平面において解決されていることだ。もしかしたら、われわれが擬古主義と呼んでいるものや、君は著作の中で全く名付けていないけれど、擬古主義に対置したもの、それらは存在しうるだろう。でもそれはただ、大きな相関関係の部分的なケースでしかないし、もしかしたら対をなさない相関かもしれない。⁽²⁷⁾〔下線は引用者による。〕

ここで注目すべきは、まず、シクロフスキーが「文学」を「非時間的」なものとして捉えている点である。それに付随して、「文学」においては「原因と結果」が「同時」的なものとして存在することになる。従って、シクロフスキーが自らの「文学史」研究において重視するのは、時間的な継起性ではなく、ある時代の「相関関係」である。いわば、文学史を共時的に構想することだといってもいい（たとえば、シクロフスキーはこの手紙の中で「ドン・キホーテはツルゲーネフと同時代である」といっている）。

このような考えに基づけば、シクロフスキーが、「文学史家の仕事」として「継続的な文学を思考し」、「古典を創造する仕事」を行うトィニャーノフの「文学史」の作り方そのものを、「反動的」であるとしたことも理解できる。なぜなら、「文学」を「非時間的」と捉え、因果関係が「同時」的に存在するということは、少なくともシクロフスキーのこの発想においては、史的な時間が生成する契機がないからである。実際、この時期までのシクロフスキーの「文学史」に関する

理論的枠組みは、メドヴェージェフ／バフチンが批判するように、彼が提起した「異化」を応用した交替図式に帰着するといっている。従って、「実際にはフォルマリストが知っているのは何らかの『永遠の現在』、『永遠の同時代性』のみである」⁽²⁸⁾。こうした文学史観に則れば、通史的に編まれるかたちのいわゆる文学史は不可能なものとならざるを得ない（もちろん、通史的に編まれるかたちのもののみが「文学史」ということではない）。

だが、シクロフスキーはなぜ、非時間性と相関関係に特徴づけられるこうした文学史観を提起したのだろうか。無論、それは、上で記したように彼が異化の図式から自らの文学論を展開していったことが最も大きな要因であろうが、しかし、ティニャーノフの掣みに倣えば、文学史(観)を構想するにあたってさえ、シクロフスキーは自己にとってアクチュアルな問題を投影しており、その文学史観には、まさしく彼の体験と彼の生きた歴史の痕跡が刻まれているということもできるのではないか⁽²⁹⁾。そのとき、非時間性は、革命や亡命といった切断と断片化に彩られ、彼自身が体験してきた大文字で語られる「歴史」に疑義を提示し、相関関係を重視することは、オポヤズというグループで協働することの重要性を訴えることになるだろう。

注

- (1) *Тынянов Ю.* Литературный факт // Поэтика. История литературы. Кино. М., 1977. С. 265-267. 邦訳は以下を参照：水野忠夫訳「文学的事象」水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』せりか書房、1982年；松原明訳「文学的事実 V. シクロフスキーに捧ぐ」松原明・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド7：レフ 芸術左翼戦線』国書刊行会、1990年。
- (2) *Степанов Л.* Дружеское письмо начала XIX в. // «Младоформалисты»: Русская проза. СПб., 2007.
- (3) *Левченко Я.* Другая наука. М., 2012. С. 68.
- (4) Там же. С. 67-69.
- (5) 文学史上の「サロン」や「サークル」、「団体」といった現象もフォルマリストたちにとっては重要な研究対象であった。その上、彼ら自身も意識している部分はあったが、オポヤズと、1815年から18年にかけて存在し、ジュコフスキーやバーチュシユコフ、ウヴァーロフやプーシキンがメンバーだった文学サークル「アルザマス」との類似はしばしば指摘される。一方、時代はくだるが、ユーリー・ロトマンを領袖とするモスクワ＝タルトゥ記号論学派の活動形態と、後期ソ連に特徴的な「仲間」というサークル的なありかたとの類似を乗松亨平は指摘している（乗松亨平『ロシアあるいは対立の亡霊：「第二世界」のポストモダン』講談社、2015年、51-54頁）。
- (6) *Колобейников С.* История жизни и история литературы // Юрий Тынянов: История литературы. Критика. СПб., 2001. С. 501.
- (7) シクロフスキーは『弦一似たものの似ていなさについて』の中で『擬古主義者と革新者』の名称について「彼の考えをより明瞭に表現するであろう、『擬古主義者＝革新者』という異なる名前を提案し、A.A. アフマトワもこれに賛成した」と述べている（*Шкловский В.* Избранное. В 2-х т. Т. 2. М., 1983. С. 136）。
- (8) 「学問的誤謬の記念碑」の執筆を含め、シクロフスキーがオポヤズ再興に奔走していた詳細については以下がきわめて参考になる：*Галушкин А.* «И так, ставши на костях, будем трубить сбор...»: К истории несостоявшегося возрождения Опояза в 1928-1930 гг. // НЛО, №44, 2000.
- (9) *Эйхенбаум Б.* Творчество Ю. Тынянова // Юрий Тынянов. Писатель и учёный. Воспоминания. Размышления.

Встречи. М., 1966. С.76

- (10) Шкловский В. Под знаком разделительным // Новый ЛЕФ, № 11, 1928. С.46
- (11) Там же. С. 44.
- (12) Там же.
- (13) Там же. С. 45.
- (14) Брик О. Т.н. «формальный метод» // ЛЕФ, №1, 1923. С. 213
- (15) Письмо Тынянова Шкловскому. Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским // Вопросы литературы, №12, 1984. С. 198.
- (16) Письмо Тынянова Шкловскому. Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским. С. 199.
- (17) Там же.
- (18) Там же.
- (19) Письмо Тынянова Шкловскому. Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским. С. 200.
- (20) Письмо Шкловского Тынянову. Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским. С. 204.
- (21) Тынянов Ю. О Хлебникове // Архаисты и новаторы. Л., 1929. С. 589. 邦訳は以下を参照：新谷敬三郎訳「フレーブニコフについて」『世界批評大系 6：詩論の現在』筑摩書房、1974年。
- (22) Там же. С. 589.
- (23) Там же. С. 592.
- (24) 但し、トイニャーノフは、必ずしも「と」を全般的に否定していたわけではない（「1928年、ロシア詩とロシア文学はフレーブニコフに会いたがっている。／なぜだろう？なぜなら、遙かに大きい尺度の、ある「と」が明らかになったからだ。それは、「現代詩とフレーブニコフ」。そして別の「と」が十分成長している。それは、「現代文学とフレーブニコフ」（Там же. С. 582. なお、引用中の傍点は原文イタリック）。「擬古主義者とプーシキン」にも見られるトイニャーノフのやり方は、従来の図式（古典主義／ロマン主義）を解除し、それを組み替えることにあり、フレーブニコフを論じる際も、彼自身はそれを行おうとしたといえる。だからこそ、従来の「未来派」という用語でフレーブニコフを語るべきだとするシクロフスキーを、トイニャーノフは「反動的」と考えた。しかし、この作業が非常に困難であることを、トイニャーノフは認識していた（「同時代人にとって同時代性の大きさを見ることは難しく、その中に新しい言葉を見ることは更に難しい。大きさについての問題は、幾世紀も経ることによって解決される」（Там же. С. 584））。
- (25) Там же. С. 581
- (26) シクロフスキーのみならず、トイニャーノフ、エイヘンバウム等が取り組んだ「文学史」の理論に関しての詳細は、以下の拙論を参照されたい：八木君人「トイニャーノフの「文学史」再考」『スラヴ研究』53号、2006年。
- (27) Письмо Шкловского Тынянову. Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским. С. 197.
- (28) Медведев П. Формальный метод в литературоведении // М. М. Бахтин (под маской). М., 2000. С. 344.
- (29) 研究者イリヤ・カリーニンは、「異化」を、革命や内戦という「歴史」によって蒙ったトラウマに対するある種の「セラピー」として捉える興味深い論を展開している（Калинин И. Прием остранения как опыт возвышенного // НЛО. 2009. №95）。